

田舎暮らしを楽しむ

(20)

佐藤 彰啓



60羽のウコッケイを飼育する渡辺彬さん

田舎に移り住んで、初めから野菜づくりがうまくいくとは限らない。
東京都羽村市から八ヶ岳に移り住んだ渡辺彬（62）、恭子（61）さん夫妻にも失敗があった。ジャガイモの植え付けを東京と同じく三月初旬に行なったところ、芽が出てから霜が降り全滅した。寒冷地のここでは、5月連休ごろに植え付けることを知らなかったのである。
気候風土が違えば、当然種まきや植え付け時期も違う。また、土質によって適する作

近所のおばあちゃんに聞く

土に親しむ(中)

物も異なる。地元のことには「地元で学べ」である。分からないことは、畑に出ている「近所のおばあちゃんに聞け！」。野菜づくりのすべてを熟知した達人である。とれた野菜の料理や保存法、その地域に伝わる漬物も教えてくれる。都会育ちで一度も鍬（くわ）を握ったことのない人も、いいお師匠さんを得れば鬼に金棒。地元の人とうまく付き合うのが、野菜づくりで上達するコツである。
渡辺さんは、六年前に三百坪（

一坪は三・三平方メートル）の土地を購入し、定年までの四年間は通いの週末農業。定年と同時に家を建てて移り住んだ。現在は、さらに五百坪の畑を借りて、年間約四〇種以上という多品種の野菜をつくっている。野菜はほぼ完全自給。都会にいる子どもたちは週末にやって来て、田舎を楽しみ、週明けには新鮮な野菜を持って帰る。

土地を買った当初に植えたブルーベリー、アンズ、ナシ、モモ、ウメに実が成りだした。移り住んで飼いだめた六十羽のウコッケイも昨春秋、卵を産み出した。親しくなった農家の人たちと一緒に直売所を作り、余剰農産物を出荷したところ、この夏は月十万円を売り上げるまでになった。

「野菜三年、果樹五年」。野菜づくりが軌道に乗るのは土づくりから始めて三年。果樹の苗が実をつけるのは五年かかる。渡辺さんのように、定住前の助走期間があると理想的。定年後の田舎暮らしの準備は五年前から始めるとよい。移り住んですぐに実りの秋を迎えることができる。